

一八世紀オランダ都市の居住パターン

—— ロッテルダムを中心に ——

大 西 吉 之

【要約】 「前工業化都市」の居住パターンに関する研究は、従来G・ショバークらの提示した都市モデルの検証という形で進められてきた。エリート層を中心とし、周辺に向かうに連れてより低い社会層がみられるというショバークの同心円モデルは、共和国のオランダ都市にも当てはまるのであろうか。本稿では、アムステルダムに次ぐ第二の商業都市であったロッテルダムを取り上げ、十八世紀半ばの所得査定資料からこの都市の居住パターンを分析した。一連の作業から明らかになった重要な結論は、都市の中心部に、エリート層ならびに富の集中がみられない、ということである。この特異なパターンは各地区の立地や職種から、その多くを説明することができた。後半では、これらの条件から説明のできない都市エリート、レヘントの居住パターンが、彼らの社会的ステイタスを示す数少ない要素であったことを示した。

史林 七八巻三号 一九九五年五月

一 問題設定

現在、「ヨーロッパの港」として名高いロッテルダムは、共和国期においてすでに、人口規模や海運・交易活動から、アムステルダムに次ぐオランダ第二の都市としての地位を享受していた。経済の中心はイギリス・フランス・ドイツといった周辺諸国との貿易と、これに付随する各種加工業にあり、とりわけイギリスとの交易量は、アムステルダムのそれを大きくしのいでいたとされている。

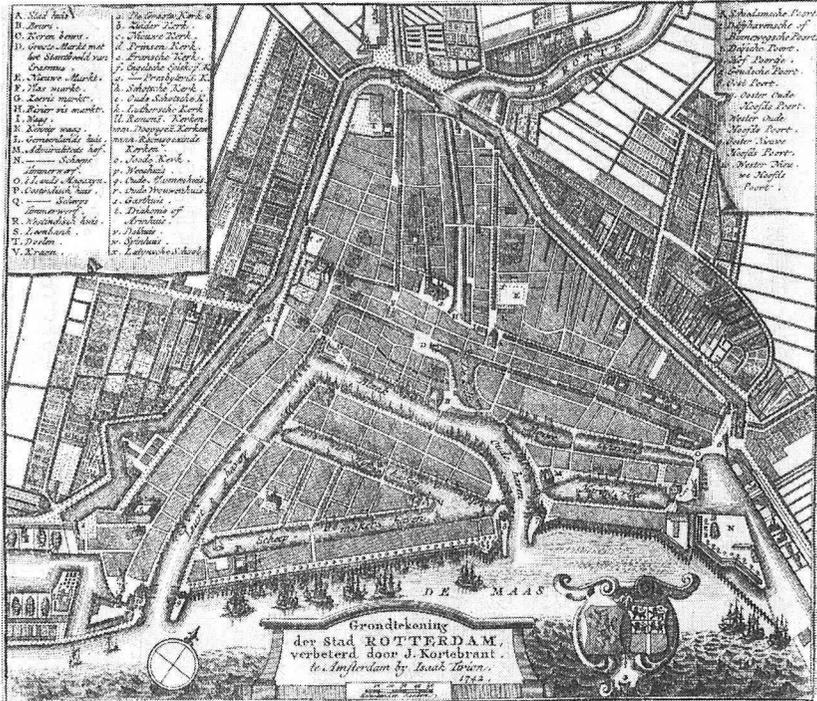
こうした当時の隆盛にもかかわらず、共和国期ロッテルダムに関する歴史研究は、戦後ほとんど手付かずのまま取り残

されてきた。とりわけ、一七世紀後半から一八世紀にかけての研究は皆無に近い。無論、こうした状況はロッテルダムの経済的重要性からみても、また当時の多様な都市のあり方を考えるうえで、望ましいものではないだろう。本稿は居住パターンの詳細な分析を通じて、商業都市ロッテルダムの姿を、その一面なりとも、明らかにしようとするものである。

居住パターンとは、その都市の担った様々な機能や当時の社会的・経済的状况といった諸要素が有機的に作用しあった結果生じるひとつの現象である。したがって居住パターンの分析とその解釈には、ロッテルダム的人口、経済、社会に関する知識が不可欠であろうし、また逆に居住パターンの特徴や変化から一八世紀ロッテルダムの都市社会に関する新たな一面が語れるかも知れない。

近代初期の都市居住パターンに関する研究は、従来G・ショバードやJ・E・ヴァンスの提示したモデルを検証する形で進められてきた。ショバ

1730年代のロッテルダム（ロッテルダム文書館所蔵）



ーグは、政治エリート層が都市の中心部に位置し、周辺に向かうに連れてより低い社会層がみられる同心円状の構造を「前工業化都市」に共通する空間的特徴とした。^①一七世紀のイギリス都市を題材としたJ・ラングトンの実証研究によると、少なくとも富の分布については同心円状のパターンがみられるという。^②また一八世紀半ばの工業都市レイデンにおいても、J・D・トゥヤルスマの研究によって同様の構造がある程度、認められた。^③ショバークは古代から工業化前夜にいたる、世界中の都市を対象としたが、少なくとも一七、一八世紀の北西ヨーロッパに関して、このモデルは一定の有効性を有しているといつてよいだろう。

J・E・ヴァンスの仮説は、西ヨーロッパの中世都市における居住パターンと一六世紀に始まる、その変容に関するものである。^④このなかで彼は、中世都市の市民社会におけるギルドの役割を重視している。当時この組織に加入することは、自由市民としての身分を得るもっとも一般的な手続きであった。またギルドとは単なる生産の管理組織にとどまらず、構成員の社交の場であり、一種の相互扶助制度でもあった。その結果、居住パターンは各ギルドごとにまとまる傾向がみられた、とする。彼のいう、こうした職業別住み分けを検証することは、そもそも資料的に困難であるのだが、それでもヴァンス・モデルがしばしば検討の対象とされるのは、それが「資本主義的」パターンへの移行を扱っているからである。

一六世紀以降、土地は生活・生産の場として保有するものから、次第に資産として所有するものへと変化した。都市住民はそれぞれの社会的ステイタスや経済力に応じた住居を選ばざるを得なくなるのである。富裕層は総じて、より広くより新しい家屋を求めて周辺部に移転するが、下層の住民は旧来の狭い土地に留まらざるを得ない。こうして近代的な居住パターンが成立してゆく。以上の仮説を厳密に検証するためには数百年に渡って生じた変化を追う必要がある。しかし、それだけの資料を揃えることは事実上、不可能であろう。実際におこなわれてきた検証とは、前工業化時代における一時点のパターンをとらえて、これをヴァンス流に解釈してみることであった。否定はしないが確証もない、といった感想が一般的だが、彼のモデルが、少なくとも社会的変化と居住パターンとの密接な関係を指摘した点は評価できる。

本稿では、分析の基礎となる一七四三・四四年の所得査定資料の紹介をおこなった後、まず、上で説明したモデルの検証・確認作業をつうじて具体的な都市のあり様を探ることとする。当時のロッテルダムは、職業や富、あるいは社会階層によってどのように住み分けられていたのであろうか。

結論から先にいえば、一連の作業から浮かび上がる、この都市の空間構造に、ショバークの示唆するような特徴はほとんど見られない。周辺部に貧民層が認められるものの、富裕な政治エリート層は中心部ではなく最南部に位置する形になっており、富の中心も南部か、最南部にみられた。ただし、これをショバーク・モデルに対する反証だと主張してみても、あまり有益な議論になるとは思えない。富裕層の集中するロッテルダム南部は、そもそも商業発展に伴って一六世紀後期に拡張された部分であり、ここに展開する居住パターンは当然、オランダの経済的興隆を前提としている。一方、ショバーク・モデルのような静態的な「一般法則」はこうした個々の歴史的経緯や、それに伴う社会の変化を排除することによって成り立っているのである。そこで後半では、このモデルとの差異を一七世紀以降に生じたロッテルダム独自の発展であると捉え、居住パターンが当時の経済的、社会的状況によっていかに規定されていたのか、という問題について考察する。

- ① G. Sloborg, *The preindustrial city, past and present*, New York, 1960.
- ② J. Langton, 'Residential patterns in pre-industrial cities: some case studies from seventeenth-century Britain', *Transactions of the Institute of British Geographers*, 65 (1975).
- ③ H. D. Tjalsma, 'De Fysieke structuur van Leiden in 1749', in H. A. Diedeniks (ed.), *Een stad in achttiende eeuw*, Leiden, 1978.
- ④ J. E. Vance, 'Land assignment in pre-capitalist, capitalist and post-capitalist cities', *Economic Geography*, 47 (1971).

二 資料紹介

1 所得査定台帳 *Kohier van de Personeele Quotisatie*

一七世紀後半から一八世紀半ばにかけて、ホラント州は *Familie Geld* と呼ばれる「所得税」の導入をくり返し試みた。当時、歳入の不足は相次ぐ不動産税の強化によって賄われていたが、所得に対しては依然、手付かずのままであった。こうした状況は税負担の不公平感を増大させる結果となり、州行政は一六七二年の「災厄の年」(第三次英蘭戦争の始まった年)をきっかけに、所得税の実施を検討し始めたのである。ただし、この「所得税」は近代的なそれとは異なり、住民の職種や家屋といった諸項目の調査から個々の所得を大まかに査定し、課税するものでしかなかった。

一六七三年の州決議によると、*Familie Geld* の対象者は公務ならびに一般の就業者であったが「公平」な税制からは程遠く、富裕な商人層と職を持たない資産家(ランチェ)が免除されていた。この最初の計画は実行に移されないままに終わったが、査定調査は一六七四年に実施された。そのうち、ロッテルダムとレイデンの台帳 *Kohier* は現存している。^①

ロッテルダム文書館に保管されている同市の台帳には、当時の地区単位 *Wijk* ごとに氏名、職種、課税額が記されており、その数は四三一八件にのぼる。これは全ハウスホルドのおよそ四割弱に相当し、非常に包括的なデータであるといえよう。しかし、この査定台帳から、ロッテルダムにおける富の分布を把握することはひどく困難である。富裕層については課税対象から外されているか、査定がひどくあまいかのどちらかであり、例えば、市参事会員の課税額はパン職人のそれを下回っている。

その後、一八世紀に入っても、新たな「所得税」導入の計画は幾度か浮上し、その都度、内容も精密化・徹底化されていった。一七〇六年の提議は日の目をみなかったが、一七一五年のそれは翌年から実施され、一七二三年まで続けられた。残念ながら、これらの査定資料については他都市のものが数例あるのみである。しかし、一七四二年に決議された最後の

Family Geld——特に Personeel Quotificatie と呼ばれる(以後、P. Q. と省略)——の査定資料は、ロッテルダムを含む、ほとんどのホラント都市のものが現存しており、これが質・量ともにもっとも充実した内容を誇っている。^②

P. Q. 査定調査の手引書によると、課税対象者は年齢、未婚・既婚に関係なく、年収六百ギルダー以上と見なされる収入・財産を有する者で、例外は、大学教授・講師／牧師／陸海軍将校の収入、渡り職人、フリーの親方、滞在六ヶ月以内の外国人であった。また査定対象は、公職、商工業、自由業、株、公債、金貸し、その他による収入並びにすべての動産・不動産と規定された。^③ このように P. Q. では、富裕層に対する例外的措置が一切見られず、この資料は居住パターンの分析に適している。しかしその一方で、P. Q. には、年収が六〇〇ギルダーを下回ると判断された人々に関する情報が欠けていることに注意しなければならない。

P. Q. の課税対象者は、表1にしたがってランクづけされる。^④ この表から明らかのように P. Q. は累進課税である。所得の査定について具体的な手順を指示する項目はないが、恐らくこれはひどく困難な作業であったと思われる。そのためか、家屋の価値や、ヨット・馬車・別荘の有無、使用人の人数によってランクの下限が自動的に決定されることになっている。例えば仮にヤン・ヤンセン氏が四輪・四頭だての馬車と別荘を所有していた場合、彼のランクは自動的に一五以上となり、少なくとも一六〇ギルダー以上の税金を納めなくてはならない。

ロッテルダムの査定台帳は一七四三年から四四年

表1 P. Q. 課税表

クラス	所得査定額		税額
1	600以上	700未満	6
2	700	800	8
3	800	1,000	12
4	1,000	1,200	15
5	1,200	1,500	18
6	1,500	2,000	25
7	2,000	2,500	32
8	2,500	3,000	40
9	3,000	3,500	50
10	3,500	4,000	60
11	4,000	4,500	75
12	4,500	5,000	90
13	5,000	6,000	120
14	6,000	7,000	140
15	7,000	8,000	160
16	8,000	9,000	180
17	9,000	10,000	200
18	10,000	12,000	250
19	12,000	14,000	300
20	14,000	16,000	350

* 以下、査定額が2,000ギルダー上昇するごとに税額は50ギルダーあがる。

にかけて作成され、ここには課税対象者の氏名、職種、家賃(持ち家でも家賃として評価)、家屋の(正確には地所の)番号、使用人の人数(徒弟、職人を除く)、査定結果、税額、馬車/船/別荘の有無などが記入されている。台帳は二種類あって、一方はロッテルダム文書館に、もう一方はデン・ハーグ王立文書館に保管されている。Familie Geld 関係の資料を整理・紹介したW・F・H・オルデヴェルトの説明によると、ロッテルダム版は徴税人の提供する情報から作成されたノートの段階であり、言い換えれば、公的な承認を受ける前の台帳であるらしい。一方、ハーグ版は税の徴収が完了した後に公的な記録として作成・保管されたものである。これらを実際に比較してみた結果、ほとんど違いはみられないことがわかったが、ロッテルダム版は査定結果の数値が塗り潰されてしまっている。おそらくこれは個人情報の漏洩を恐れての措置であろうと考えられる。このため、本稿では主としてハーグ版のデータを使用し、差異があつた場合もこの版を優先した。

ロッテルダム版の査定台帳に記載された二六〇六件の情報は、四万四千の人口推定値から全ハウスホルドの二割強に相当すると考えられるが、そのうち分析には、本人にまだ管理能力のない子供が所有する資産に課税されたケース(後見人に対する課税という形になっている)や情報が不完全であるケース、そしてロッテルダム周辺部の住民を除いた二五〇〇件を取り上げた^⑦。一方、年収が六〇〇ギルダーに満たないと判断された人々について、この資料はほとんど何も語ってくれないが、彼らの居住パターンについてはP・D・対象者の空白地区という間接的な形で推し量ることができらるだろう。

- ① Gemeentearchief Rotterdam, OSA, nr. 4166. ハーツ版は Algemeen Rijksarchief, Archief der Rekenkamer ter Auditie, nr. 39.
- ② 2101. Familie Geld の解説に 2101 W・F・H. Oldewelt, 'De Beroepsstructuur van de Bevolking der Hollandse Stenhebbende Steden volgens de Kohieren van de Familigelden van 1674, 1715 en 1742', *Economisch-historisch Jaarboek*, 24 (1950), pp. 80-88. ③ W・F・H. Oldewelt, 'Een merkwaardige verzameling belastingkohieren in het archief der gemeente', *Rotterdamsch Jaarboekje*, 5e reeks 7 (1949).
- ③ Gemeentearchief Rotterdam, OSA, nr. 4169, 4170. ④ 都市周辺部の居住位置は、資料の性質上、特定できないので考察から除外した。
- ④ Gemeentearchief Rotterdam, OSA, nr. 4170.
- ⑤ ロッテルダム版は Gemeentearchief Rotterdam, OSA, nr. 4169.

二 分析単位と位置の特定

都市の居住パターンを分析する際、研究者はまず対象とする都市をいかに区分しておくべきか、という問題に取り組まなければならない。都市の仕切り方次第によって、パターンの現れ方が大きく異なってしまうからである。仮にある特定の社会グループが都市のある部分に集中していたとしても、それが分析用の境界線によって二分、三分されてしまえば、研究者は「均等な分布」を確認することになる。こうした問題に対処する方法のひとつは、区分をできるだけ細かくすることである。しかし、この方法は資料的に困難な場合が多く、先行研究ではもっぱら当時の地区単位に基づいた分析がおこなわれた。

共和国期のオランダ都市を扱った研究はこれまでに二例あるが、これらもまた、オランダの地区単位 *Wijk* を分析単位としている。^①しかし当時の区割りは、R・キステマーカーも指摘するように、居住パターンの分析に向いているとはいえない。彼によると *Wijk* は当時、行政の下部単位として機能していたが、その一方で、それは市民軍の一中隊に対応する軍事単位でもあった。各 *Wijk* は将校・下士官と自前で武器を調達できる市民が必ず一定数含まれるように設定されていたのである。^②したがって、*Wijk* に際立った富の偏差が生じることはこの区割りの性質上あり得ない。アムステルダムの P.O. 資料を分析の中心においた T・レヴィ女史は、六〇の *Wijk* それぞれに相対的な差異を確認したものの、結論としては様々な社会階層の混在を居住パターンの特徴とした。しかし、キステマーカーの批判以降、こうした偏向性をもつ単位に基づいた彼女の見解を修正する新たな研究が求められている。

ロッテルダム *Wijk* の査定台帳では、アムステルダムとは異なり、一二に仕切られた *Wijk* ではなく、四つの *Kwartier* ごとに区分けされている。一六七四年の *Familie Geld* では *Wijk* 単位にまとめられていたのだが、その後いつ交替したかは不明である。いずれにせよ、これらの区分が以下の分析に適当であるとは思えない。*Kwartier* では単位が大きすぎるし、*Wijk* では抱え込む問題が大きすぎる。そこで今回は、以下で説明する複数の資料によって P.O. 対象者の住所

を可能な限り特定した後、分析用の区分を新たに設定した。

P. Q. 査定台帳には、各対象者の家屋が位置する地所に割り振られた番号 Verponding Nummer が記入されており、これが住所特定の唯一の手掛かりとなる。この番号は、そもそも不動産税を課税する際の認識番号であったものだが、P. Q. ではこの番号の順番に沿って査定がおこなわれた。一方、地所にはもうひとつ別の番号があった。各地所の所有者を記録する際に使用された番号 Protocol Nummer である。当時、これら二種類の番号が併存したことで、役人も混乱しがちであった。そこで一七七四年から七七年にかけて両番号の対照帳簿が作成されたが、この資料は単なる番号の突き合わせ以外に、各地所の位置を特定する上で必要不可欠な情報を有している。帳簿には、ある地所が通りの四つ角のいずれかに位置している場合、必ず交差する通りの名前と方角(どちら側であるか)が記載された。このため、少なくとも四方を通り・運河に囲まれた一ブロックの空間に何番から何番の地所が含まれているかが明らかになるといってよい。^④

ロッテルダムの地図に関しては、一八世紀に詳細な都市地図が作成されなかったため、一六九四年に出版された詳細な擬似鳥瞰図(平面図に建築物を立体的に書き込んだもの)と一八三九年に作成された、正確な測量に基づく都市地図 Kadaster Kaarten^⑤との比較作業を平行しておこなった。その結果、一八世紀には地所を含め、ほとんど都市に変化が生じていなかったことが明らかとなったので、この点で分析に悪影響を及ぼす心配はないと考えられる。

分析用の都市区分は基本的にブロックを単位とし、ロッテルダムを一四五に分割した。この数は、居住パターンの詳細な把握に十分であろう。またブロックには Wijk に見られるような「偏向性」はない。ただし、表通りに面した家屋と、これと背中合わせになる裏通りに面した家屋に住む人々との経済的な差異は分析に現れないことを注意しておく。

分析単位に関する最後の問題は、ロッテルダムの場合、当時の総家族数を示唆する資料が欠如しているという点である。つまり、ロッテルダムでは各単位に占める P. Q. 対象者の割合を直接算出することができない。そこで本稿では、一単位に含まれる地所の総数は、その単位内に生活する家族数と正の比例関係にある、と仮定した。実際にはひとつの地

所に家屋が複数みとめられるケースがあり、貧民の集中する地区ではとりわけこうした傾向がみられたはずである。また、マース川と接する南部では居住スペースのない倉庫や工場も含まれている。恐らく、二低所得層の割合が多い地区ほど、D.の対象者の割合は実際よりも多めになってしまっただろう。とはいえ、そもそもD.は低所得者を対象外としている。したがって、この種の弊害は分析結果に大きな影響を与えることはない、と考えられる。

① T. Levie, *Van Kelder tot grachtenpand; wonen in Amsterdam in het midden van de 18e eeuw (doelgroep scriptie Hissorisch Seminarium van de Universiteit Amsterdam)*, Amsterdam, 1977; H. D. Tjalsma op. cit.

② Gemeentearchief Rotterdam, ORA, nr. 621-629.

③ R. Kistemaker, 'Functiekaarten en de analyse van de economische en sociale structuur van Amsterdam in de seventiende en achttiende eeuw' in M. Jonker, L. Noordgraaf en M. Wagenaar (eds.), *Van Stadsheer tot Stadsgevoel*, Amsterdam, 1984.

④ きた'通りの確認を地所の特定とは'以下の文献・資料を参考にした。J. M. Droogendijk, *Rotterdamsche Straatnamen*, Rotterdam, 1910; Algemeen Rijksarchief, Financier van Holland, nr. 506, 542.

⑤ Gemeentearchief Rotterdam, R.I. 39.

⑥ Gemeentearchief Rotterdam, R.I. 61.

三 一八世紀ロッテルダムの居住パターン

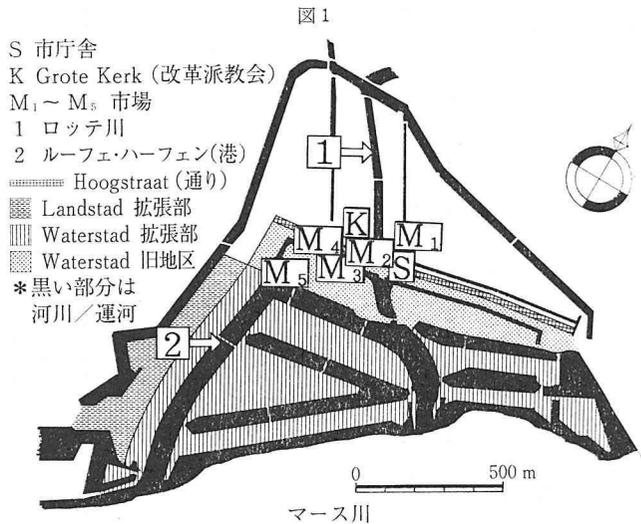
共和国期のロッテルダム経済は、他のホラント都市と同様に一六世紀末から一七世紀後期にかけて急速な成長をみせた。こうした発展は、にしん・鯨を中心とした漁業やイギリス・フランスとの貿易・海運業によって支えられ、都市の沿岸部では一六世紀末から一七世紀始めにかけて大がかりな整備・拡張が進められた。マース川沿いの南部を形成する Waterstad の大半がその際に造成され、俗に Drie Hoek (三角形) と呼ばれるロッテルダムの外観が完成した。以後、Waterstad の拡張部は海運・交易活動とそれに伴う加工業の中心としての役割を担った。^①

一方、北半分を構成する Landstad と旧南部は政治・宗教的機能や、市場機能の中心としての地位を維持した。これ

は図1にみられる市庁舎、改革派教会、各種市場の位置から明らかである。ロッテルダム市の中心部は、概して東西を横切る Hoogstraat 沿いか、あるいはその周辺にあったといつてよいだろう。以上の図式には、共和国期を通じてほとんど変化がみられなかった。

経済繁栄に陰りの見え始める一七世紀後期から、P.O. の査定調査がおこなわれた一七四三・四四年にいたる時期は、オランダのいわゆる「衰退期」と重なっている。人口動向は成長から停滞もしくは微減に転じ(表2)、諸産業は周辺諸国との競争によって、かつての勢いを失っていった。統計資料の絶対的な不足から、ロッテルダム経済の軌跡を追うことはまず不可能に近いが、少なくとも外国貿易については、船舶数や若干の関税データから、一定のレベルを維持していたと推測されている。一八世紀におけるロッテルダムの対外取引引きは、基本的に英仏から輸入した商品を、精製・加工したうえでドイツ内陸部へ輸出するというものであった。フランス産ワインに替わって砂糖、たばこといった植民地物産が取り引きの大きなウェイトを占め、工業部門もこれに伴って砂糖の精製やたばこの加工などが盛んであった。この他には、イギリスからの穀物、石炭輸入や、これらを原料としたジン、ウィスキーの生産・再輸出があげられる。

問題は、こうした諸産業の重要度をいかに比較するか、という点にあるのだが、一八世紀半ばのロッテルダムの経済構造について何らかの知見を得るには、今のところ P.O. の資料を分析するほかない。上で述べたように、この資料は年収



六〇〇ギルダーを下回る住民についての情報を持たないため、ここから得られる全体像が、かなり偏ったものであろうことは想像に難くない。とはいえ、居住パターンの分析をおこなう前に「D」データ全体を産業別に分類し、その比を求めておくことも、あながち無駄な作業ではないだろう。

近代初期の様々な職業を分類する方法については、オランダ史研究者のあいだでひとつの合意があり、スリッヘル・ファン・バートがオーフェルエイセル州の研究で採用した、一八八九年職業センサスの分類法を用いることになっている^③。彼がこの分類をつかった理由は、単に一七九五年のセンサス資料を一八八九年のそれと比較するためであったが、彼の研究が高く評価されたこともあって、以後、これがひとつの基準とされている。

一八八九年の職業分類は、三五の項目から成り立っている。ここでは「D」にあわせ、「ランチェ」「その他・不明」の項を加え、「保険業」の項を除いた。また「ランチェ」の項を産業部門として独立させた。他と区別するためである。なお、この分類では金融の項が商業部門にふくめられていることを指摘しておく。

表3には、ロッテルダムの他に、オランダ第一の商業都市アムステルダムと、毛織物業の盛んな内陸の工業都市ハーレムの数値を置いた。これら三都市の産業構造を相互に比較すると、「D」資料が各都市の基本的特徴を正確にとらえていることがわかる。ハーレムは商業部門より工業部門の割合が大きく、特に毛織物業のウェイトが大きい。アムステルダムとロッテルダムのパターンは比較的似通っているが、両者を詳しく比較すると、商業部門、とりわけ運輸、金融におけるアムステルダムの充実ぶりが際立っている。事実、ロッテルダムは資本の規模や海運の分野でアムステルダムに到底及ぶものではなかった。工業部門では、ロッテルダムに毛織物業の発展がみられないことと、食品工業がア

表2 ロッテルダム／コールの人口動向

1622年	19,780 (248)
±1675年	±45,000
±1690年	±51,000
±1745年	±44,000
1795年	57,510 (4,298)
1809年	59,118 (4,000)

出典：G. J. Mentink, A. M. van der Woude, *De demografische ontwikkeling te Rotterdam en Cool in de 17e en 18e eeuw*, 1965, Rotterdam.

* 括弧内は、隣接地域コールの人口。推定値は、ロッテルダムとコールの合計。

表3 職業構成

		アムステルダム		ロッテルダム		ハーレム	
農業・漁業・狩猟							
17	農業	7		3		19	
18	漁業, 狩猟	2		0		2	
		(9)		(3)		(21)	
工業							
1	ガラス, 石, 石灰	37		9		6	
2	印刷	20		6		6	
3	建設, 土木	474		117		79	
4	化学工業	163		32		26	
5	木材加工	255		56		33	
6	衣服	212		48		24	
7	芸術	23		3		5	
8	皮革	117		15		23	
9	泥炭, 製塩	0		0		0	
10	金属加工	485		90		54	
11	製紙, 加工	4		0		0	
12	造船, 馬車	72		13		12	
13	道具, 器機	86		10		10	
14	織物	247		30		153	
15	蠟燭, 精油, 石鹼	77		15		9	
16	食品	986		257		138	
		(3258) 25.7%		(701) 26.9%		(578) 37.2%	
商業・金融							
19, 23, 24	商業	5068		930		330	
20	運輸	1143		142		64	
21	金融	135		14		7	
		(6346) 50.1%		(1086) 41.7%		(401) 25.8%	
社会サービス							
25	自由業	517		103		56	
26	教育	87		17		17	
27	救貧	15		6		8	
28	家内サーバント	5		0		0	
30, 31, 32	公務	650		214		123	
33	治水	0		0		0	
34	聖職	54		30		21	
		(1328) 10.5%		(370) 14.2%		(225) 14.5%	
ランチエ							
35	ランチエ	1659 13.1%		365 14.0%		209 13.4%	
その他, 不明		55 0.4%		81 3.1%		120 7.7%	
合 計		12655		2606		1554	

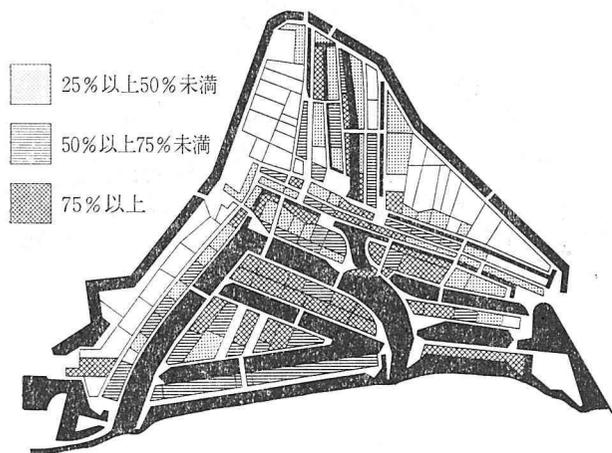
ムステルダムに匹敵する割合を有していたことに注意しておきたい。前者は、一七世紀に毛織物輸出を主体とするマーチャント・アドヴェンチャラーズをロツテルダムが積極的に受け入れた要因のひとつであったし、後者は、対外貿易を前提とする砂糖精製や酒造業の発展が反映したものである。^⑤

一方、部門によっては三都市ともほとんど差が見られない場合もある。ランチエは、まさしくそのケースであるし、社会サービス部門でも、アムステルダムの値がやや小さいが、大きな違いはない。その原因は恐らく、これらが各都市独自の経済基盤に直接左右されない分野である点に求められるだろう。

P. Q. 資料からみた一八世紀のロツテルダム経済は、まさしく典型的な商業都市のそれである。商業部門はデータ全体の四割をしめ、そのほかにも中継貿易とリンクした加工業「トラフィーク」の存在がみられた。また、三都市に共通する特徴としてランチエ、公務といった非実業部門が一定の割合を占めている点に注意したい。これらは富裕層の割合が極めて高く、彼らの居住パターンは都市全体の富の分布に大きな影響を与えた。ロツテルダムで所得が三〇〇〇ギルダーをこえる住民は全体の一五%を占めるが、このうちランチエと高位の行政職をしめる政治エリート（レヘント）は、商人の二六%に次いで、順に二四%、一四%と富裕層の多くを構成している。

図2には、各ブロックにP. Q. 対象者の占める割合が三段階で示されている。この中には、産業部門別の、あるいは所得別の居住パターンが様々に隠されているのだが、まずはここで全体的なパターンの特徴につ

図2 P. Q. 対象者分布（人数/地所数）



いて二点ほど確認しておこう。ひとつめは、周辺部にP.O.の対象者がほとんど見られないことである。これは、都市の中心から離れるにしたがってより低い社会層がみられるとしたシヨバークの同心円モデルに一致している。もうひとつは、P.O.の対象者が、次の三つの地区に集中している点である。すなわち、Waterstad 拡張部、Hoogstraat 周辺、そしてロッテルダムの中央を南北に通るロッテ川周辺部である。これらの地区は職業・所得レベルの点でそれぞれ異なった特色を有している。

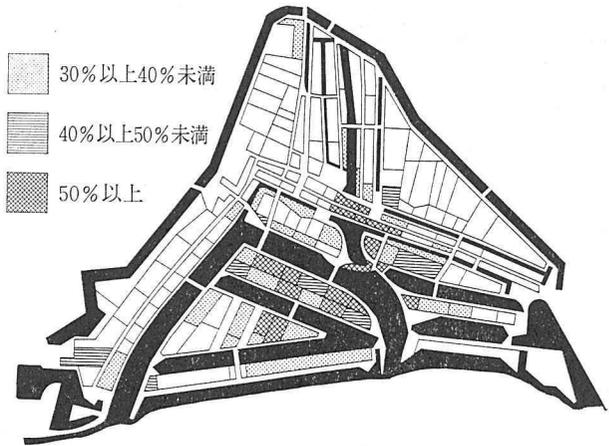


図3 商業部門

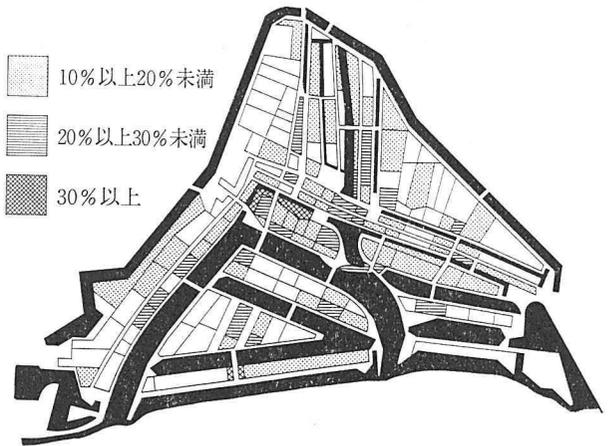


図4 工業部門

まずは、産業別のパターンから分析を始める。図3から図6は、順に、商業、工業、社会サービス、ランチエの各居住パターンを示している。このうち、商業と工業のパターンについては比較的容易に理解できる。商業部門は、図3から明らかのように Waterstad の港周辺と市庁舎付近とに集中している。前者は、いうまでもなく貿易活動の中心であり、主に富裕な商人の多くがここに居を構えていた。後者は Hoogstraat に面した都市の中心部に当たり、P.O. 対象者の多くは中産層に属する商店主たちである。商業部門の居住パターンは、総じて立地条件に大きく規定されていた。

一方、工業部門の特徴は、顕著な集中がみられないことにある。図4にみられるパターンは、Landstad と Waterstad の双方への拡散を示している。その理由のひとつは、工業都市と異なり、生活に深く結び付いた業種がこの部門の上位を占めていたことにあるだろう。第一位のパン焼き職人(七六名)は、その性格上一ヶ所に集中することはなかったし、その次に多い大工(四四名)も同様に広く拡散していた。もっとも、職種ごとにまとまる例がみられないわけではない。白木(を加工する)職人、靴職人、ナイフ職人、かつら職人、錫細工師の多くは、大市場(M3)の南西・西方向に面する数ブロックあるいはその周辺に居を構えており、この種の集中は当時、小規模ながら確かに存在していた。ただし、ここで注意すべき点は、図4にみられる工業部門の居住パターンはあくまでP.O. データに基づいたものでしかない、ということである。P.O. の資料は、例えばビール醸造業や砂糖精製業といった大規模な生産活動に従事した多くの労働者に関してほとんど何も語らない。したがって、この部門に大規模な集中がみられた、という可能性も否定できないのである。

残る二部門は、社会サービス、ランチエである。これらについては、商工業と違って、職種と立地条件との関係からパターンを説明することが難しい。図5は、社会サービス部門の居住パターンである。集中のみられるポイントとしては、ロッテ川沿い、Hoogstraat 沿い、Waterstad (中央部・南部)を挙げることができよう。この部門のほとんどは、自由業と公務とから成り立っており、その比は一对二である。この内、前者のパターンは問題ない。自由業の内訳は主として医者(二五名)、外科医(三二名)、帳簿管理(二五名)であるが、前の二つは、その性質から予想される通り、全体的に拡散して

いる。また、残りの「帳簿管理」が商業の中心である Waterstad に集中していることも理解できよう。しかし、公務の場合はいささか事情が異なっている。この項目は全体の三分の二を占めているにもかかわらず、図には市庁舎付近に目立った集中がみられないのである。三〇%以上の割合を示している箇所の大半は、公務に属する人々の集中するブロックであるが、とりわけ集中のみられる Waterstad は、逆に行政の中心からひどくかけ離れている。

ロッテ川沿いに集中するランチエのパターンも同様に説明が困難である。もっとも、この場合の問題は「ランチエ」と

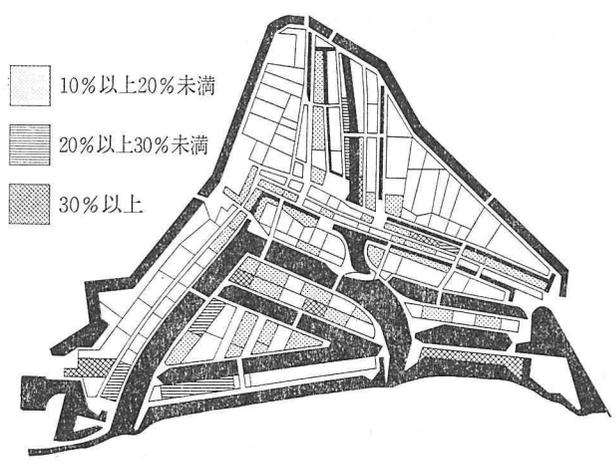


図5 社会サービス部門

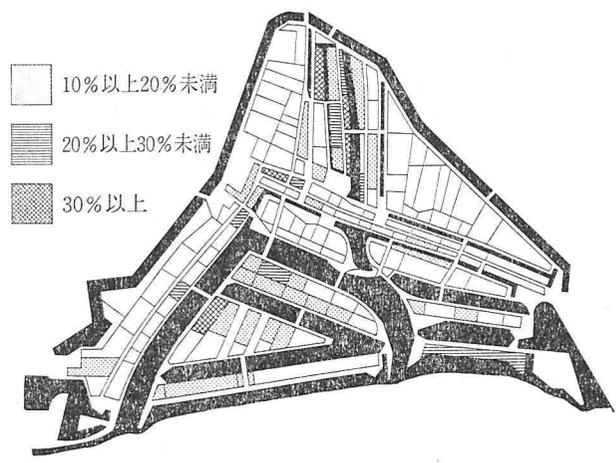


図6 ランチエ

いう項目が職業分類にありながら、一定の職業グループを特定していない点にある。そもそも業種から居住パターンの特徴を理解することが不可能なのである。彼らの集中する地点は、経済活動の中心から離れた Landstad で、その中でも概して地所が大きく、また都市の悪臭から逃れることのできたロッテ川周辺にあったが、これは恐らく、ランチェの性質を反映したものであろう。ただし、ランチェというと、リスクの大きい商工業から退いて株や国債への投資に切り替えた資産家、といったイメージがまず思い浮かぶが、実際には女性がこの項目の半数以上を占め（二二五名）、その多くは寡婦（一四八名）であった。つまり、ランチェの多くは遺産相続によって財産を得た人々であった。

ロッテルダムにおける産業別パターンのほとんどに、職種と立地との密接な関係が存在する。これは、以上の分析から明らかであろう。唯一の問題は、——職種を限定しない「ランチェ」の項を除くと——こうした要素から説明のできない「公務」の特異な分布である。その成り立ちと社会的意味については次章で扱うが、この問題は、一八世紀ロッテルダムの富の分布をみる上でも、とりわけ重要なポイントとなる。

図7は、ロッテルダムの全体的な富の分布を示している。ここから明らかなおり、所得平均の最も高いブロックは、シヨバークの同心円モデルとは異なり、都市の最南部に位置している。その主な要因は行政の要職を占める政治エリート、レヘントの集中にあり、彼らはロッテルダムの居住パターンを、とりわけ特異なものにしているのである。また、ロッテルダムの富の分布は、これを幾つかの所得レベルに分けてみると、さらに従来のモデルから逸脱した特徴を示す。

ここでは、年間所得が六〇〇ギルダー以上一一〇〇ギルダー未満ある者（ランクA）、一一〇〇以上三〇〇〇未満ある者（ランクB）、三〇〇〇以上の者（ランクC）とに区分し、それぞれの集中度を図8から図10に表した。この三区分は、大まかにAが職人、中小商店主、Bが自由業、行政職、商人、大商店主、徴税請負人に、Cがランチェ、レヘント、大商人に対応する。以下、各パターンの特徴を挙げてみよう。

ランクAは、P. O. 対象者の五〇%を占める。重心は Landstad にあり、とりわけ、Hoogstraat 沿いの市場付近に中

心がみられる。これは、市庁舎付近の商業部門の集中や、大市場付近の職人達の居住パターンを所得面から確認していることになる。続くランクBは、全体の三五%を占めている。図9によると、このランクに属する人々はロッテ川沿いとWaterstadに集まり、ランクAの中心を取り囲むように分布している。ロッテ川周辺の集中はランチエのそれに、Waterstadの集中は商業部門のそれに対応する。富裕層を構成するランクCになると、Landstadには若干のランチエがみられる程度で、重心は大商人を中心とするWaterstad中部とレヘントを中心とする最南部へと移動する。つまり、都市

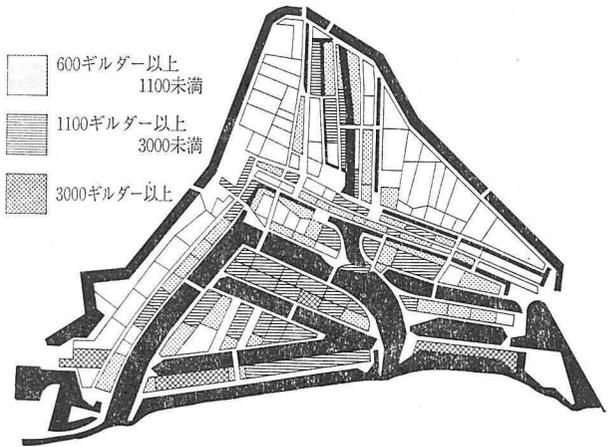


図7 所得分布（所得合計／地所数）

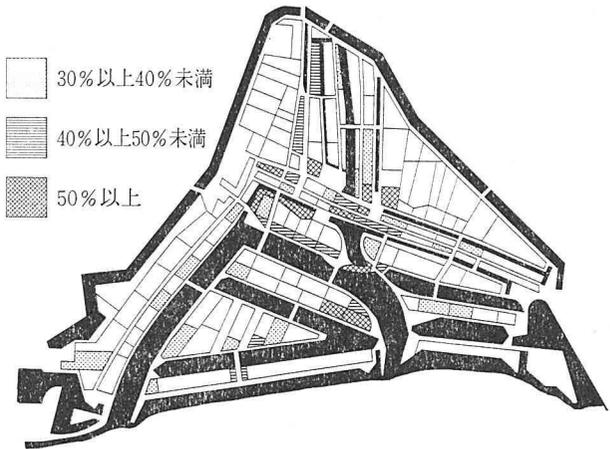


図8 ランク A

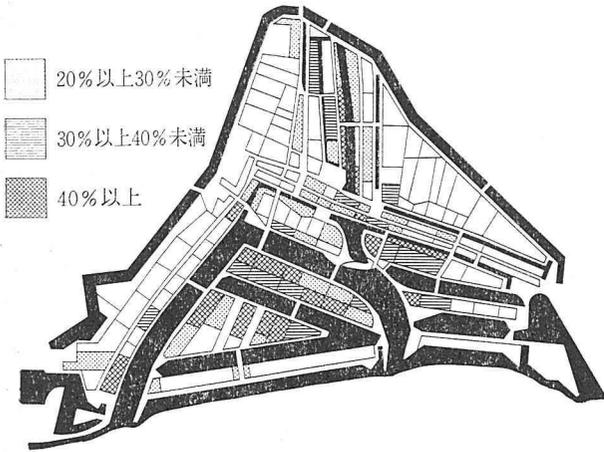


図9 ランク B

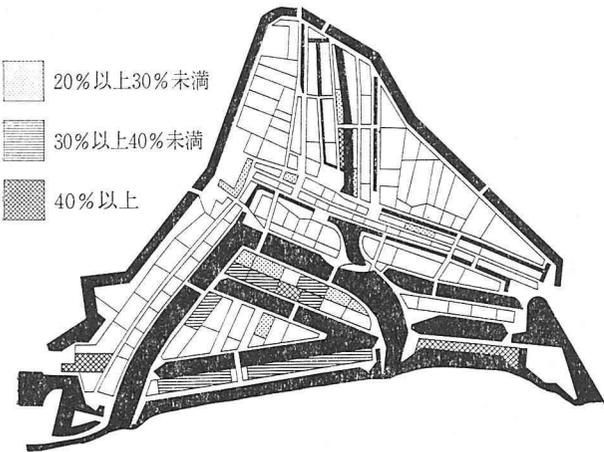


図10 ランク C

の中心部から離れる程、M・O 対象者の所得平均は上昇しているものであり、一八世紀ロッテルダムに関して、シヨバークの同心円モデルはあてはまらないことがわかる。

ただし、こうした特異な形にそれほどこだわる必要はないだろう。産業別の分析から明らかになったように、ロッテルダムの居住パターンは、職種や立地から、その多くを説明することができる。問題は、パターンそのものではなく、これらの要素から説明できなかった「公務」、とりわけレヘントの居住パターンにある。このパターンは、周辺部に最富裕層

が位置するという点で、ヴァンスの描いた近代的居住パターンを思い起こさせる。しかし、ロッテルダムの場合、この分布は最富裕層全般の周辺への脱出ではなく、あくまでレハントという政治エリートの集中を主体とした結果であった。また、これが「資本主義的」土地所有の反映であるとする理由もない。とすれば、彼らの居住パターンは、いつ、どのよう形成され、また、何を物語っているのだろうか。次章では、一七世紀のパターンとも比較しながら、その成り立ちと意味について考察することにした。

① L. J. C. J. Ravesteijn, *Rotterdam tot het einde van de achttiende eeuw*, Rotterdam, 1933, p. 78-96; M. van der Burgh, 'Statue huizen en een woud van masten', in P. Ratsma, M. van der Burgh, R. Detingmeijer, P. Drewe (eds.), *Rotterdam een reis door de tijd*, pp. 65-72.

② 一八世紀ロマンダムの商工業について Joh. de Vries, *Amsterdam-Rotterdam: rivaliteit in economisch-historisch perspectief*, Bassum, 1965, p. 56; J. G. van Dillen, 'Naschrift. De achttiende eeuw', *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 61 (1948), p. 29; P. J. Dobbelaar (ed.), 'Een statistiek van den in- en uitvoer van Rotterdam in 1753', *Economisch-Historisch Jaarboek*, 7 (1921). 拙稿「一八世紀オランダ商業とロマンダムの植民地物産——ロマンテルダムとロ

マンテルダムの盛衰——」『西洋史学』第一六八号。

③ B. H. Sticher van Bath, *Een Samenleving onder Spanning*, Assen, 1957; *Uitkomsten der beroepsstelling in het Koninkrijk der Nederlanden op den een en dertigsten December 1839*, 's-Gravenhage, 1894.

④ R. Bijlma, 'Rotterdams Handelverkeer met Engeland tijdens het verblijf der Merchants Adventurers, 1635-1652', *Bijdragen voor vaderlandsche geschiedenis en oudheidkunde*, 4 (1917).

⑤ C. Visser, *Verheersindustrieën te Rotterdam in de tweede helft der achttiende eeuw*, Rotterdam, 1927, p. 54, 93; D. Omrod, *Anglo-Dutch Commerce 1700-1760*, University of Cambridge Ph. D. thesis, 1973, pp. 204-245.

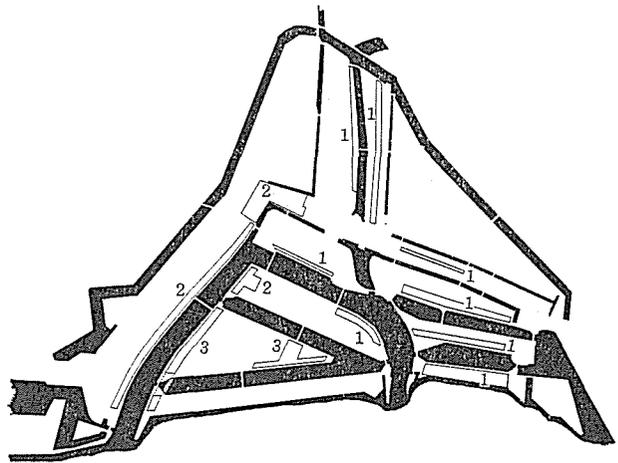
四 レハントの居住地域

「レハント」という言葉は、一般に市政の中核を成す政治エリートを意味する。具体的には、市参事会員(二四名)に、司法の要職であるスヘーペン(七名)を加えたメンバーとなろう。① スヘーペン職は、それ自体に「レハント」としての社会的地位を保証する性質はなかったが、任期後も O. B. としての肩書きがゆるぎされたり、教会で特別な席が与えられたり

あったが、一七〇二年に都市の西側に接する Zalmhaven が製材・造船所向けに整備・売却され、工場はそこに移動した。一方、東部（パートC）は、以前から住宅の並ぶ地区であった。この通りは片側がマース川に面していたために裏通りがなく、地所はどれも広いものであった。ここでは一七世紀後期から最富裕層による家屋の建て替えが進み、一八世紀前半のあいだに、ロッテルダムでもっともレヘントの集中する地区となった。⑤ このように、彼らは従来の工場や住宅を移転・改築することによって、広い敷地をまとまって確保する機会を得たのである。

こうしたレヘントの集中は、一八世紀だけにみられる現象ではなかった。一六七三年の Familie Geld 台帳を基にして作成したレヘントの分布図(図12)は、確認できるレヘントの人数がわずかで、位置も大まかであるが、ここからすでにルーフェハーフェン沿いに集中がみられたことがわかる。しかし、ここで興味深いのは、Waterstad に位置する三角形の島に六名のレヘントが居を構えていることである。一七世紀に作成されたロッテルダムの地図を幾つか比較すると、この島の各通りに建物が立ち並んだ時期は三〇年代半ばから四〇年前半であると推定される。つまり、この地区は一八世紀始めの最南部と同様、広い敷地が確保できる、一七世紀前半でもっとも新しい土地であった。レヘントは一七・一八世紀を通じて、新たに広い敷地が確保できる地区にまとまる傾向を有していたのである。それでは、こうした彼らの特徴は、一体どのように理解すべきなのであろうか。

図12レヘントの分布 (1673年)



従来の説において、レヘントは、貴族的な生活様式を身に付けることによって、自らの社会的ステータスを示そうとするもの、と考えられてきた。一七世紀前半、彼らの大半は何等かの経済活動に従事しており、一般富裕市民と区別できるような社会的・経済的差異は存在しなかったからである。レヘント研究の大家D・J・ロールダによると、一七世紀初頭、レヘントは総じて貴族の称号の獲得に奔走したという。一六〇〇年ごろ、フランス外交官 *Quarez* はこれを「この国のナイトの称号を求める伝染病」と評した。さらに一七世紀後期から、レヘントは次第に実業界から手を引き、富裕市民層との性格の違いをより明確にしていたが、ロールダや彼の後継者は、これら一連の現象をひとつの流れと捉え、レヘントは閉鎖的な政治エリート層を形成してゆくと同時に、一七・一八世紀を通じて、領地や別荘を有する一種の準貴族に変化していったと推測した。彼は、この現象をレヘントの「貴族化」と呼んだ^⑦。

近年、ロールダの見解は、M・ブラックらの研究によって修正されることとなった。彼らは、一八世紀の各種資料からレイデン、ハウダ（ゴード）、ホルンのレヘントに関する包括的な分析を試み、レヘントと富裕市民との乖離は、ロールダが想定したほど大きいものではなかったことを明らかにした。一八世紀におけるレヘントの財産構成をみた場合、少なくとも大土地所有や貴族の称号に固執するような傾向は確認されなかったのである。レヘントは、あくまで市民的性格を色濃く残したエリートであった。この点は、P・Q資料の各項目からみたロッテルダム・レヘントの性格とも一致する。

たとえば大商人の集中する地区は、Waterstadの中央部に位置していたが、P・Q資料からレヘントと大商人の家屋を比較すると、年間所得が同レベルであれば、その評価額にほとんど違いはみられない。また、資産の差を考慮しなくとも、家屋の規模や装飾には限度があり、大きな差は生じなかった。実際、家屋から両者を明確に区別することは困難である。また、レヘントとその他の富裕市民との差異は、家屋以外の資産においても、必ずしも明確ではなかった。同様に、大商人層とレヘントとを比較した場合、後者の優越性は家内サーヴァントの数や馬車、ヨット、別荘の有無といった点にみられる。しかし、レヘントのかかえるサーヴァントはせいぜい数名多い程度であったし、馬の頭数も同様であった。こ

のような差は、彼らの強大な政治権力に比べると、いかにも控えめであった。

以上の議論は、レハントの空間的まとまりが、彼らの社会的ステイタスを明示する数少ない信号のひとつであったことを教えてくれる。当時、もっとも壮麗な地区とは、レハントの集まる最南部やルーフェハーフェン沿いのことであった。

レハントが比較的新しい地区に集中するという傾向は、アムステルダムやレイデンでも確認されるが、ここで述べたレハントの集中とその他の社会的背景は、ホラント都市に共通する特徴ではないかと思われる。また一七四三・四四年にはもうひとつ、Hoogstraat沿いの市庁舎近くにレハントが集中する地点が確認されるが、一六七三年の分布には見当たらない。恐らく、この集中は都市の中心部に政治エリートがみられた時代のなごり、といったものではないだろう。

- ① Cf. H. W. Unger, *De Regering van Rotterdam 1328-1892*, Rotterdam, 1892, pp. 12-14; K. W. J. M. Bossaers, 'Macht, Rijkdom en Aanzien: De Regenten in het Noorderkwartier in het midden van de achttiende eeuw', *Holland*, 21 (1989).
- ② J. de Joop, *Een Delftse Bestaan: het dagelijks leven van Regenten in de zeventiende en achttiende eeuw*, 1987, p. 48.
- ③ Gemeentearchief Rotterdam P. W. nr. 560, KITTY GAR port. I nr. 43.
- ④ L. J. C. J. van Ravesteyn, op. cit., pp. 92-93.
- ⑤ Ibid., p. 80.
- ⑥ Gemeentearchief Rotterdam I 38 and I 31-1.
- ⑦ Cf. D. J. Roorda, *Partij en Factie*, Groningen, 1978; M. Prak, 'Aristocratisering' *Spiegel Historiae*, 23 (1988).
- ⑧ M. Prak, *Gezeten burgers. De elite in een Hollandse stad Leiden 1700-1780*, Amsterdam / Dieren, 1985; L. Kooijmans, *Onder regenten. De elite in Hoorn 1700-1780*, Amsterdam / Dieren, 1985; J. J. de Jong, *Met goed fatsoen, elite in een Hollandse stad, Gouda 1700-1780*, Amsterdam / Dieren, 1985.
- ⑨ T. Levie, op. cit., p. 75; M. Prak, *Gezeten burgers*, pp. 225-229.

五 小 結

一八世紀半ばにおけるロッテルダムの居住パターンは、富の分布に関して、ショバークの同心円モデルと異なった特徴を有していた。都市中心部には中産層の集中がみられ、これを取り巻く形で富裕層が分布していた。周辺部では、北部こ

そのD、Dの対象外となった住民によって占められていたものの、南部には、レヘントを中心とした最富裕層の多くが居を構えていたのである。その主たる要因は、ひとつに一六世紀後期に始まる商業発展があげられる。南部の港周辺は大規模に拡張され、海外貿易に従事する大商人層の分布を決定づけることとなった。また、一七世紀後期に始まるオランダ経済の相対的衰退も、居住パターンの形成に大きな影響を与えた可能性がある。というのも、レヘント層が、リスクの大きい実業から次第に手を引いていったことは、すなわち、彼らの居住パターンが立地条件に左右されにくくなったことを意味するからである。残念ながら、一七世紀前半の居住パターンをうかがい知る手掛かりはなく、この点を証明することができない。本稿では、これとは別に、社会的ステイタスの視覚化、という社会的要因を指摘した。

今回の分析は、ショバーク・モデルとの差異を説明する、という形をとったが、その反面、都市の社会的変化と居住パターンとの関わりについては、立ち入って論じることができなかった。ヴァンス・モデルには適合しなかったにせよ、南部周辺にみられたレヘントを中心とする最富裕層の集中は、ロッテルダムの「近代性」をどの程度意味しているのだろうか。比較的是っきりとした所得レベル別の居住分化は、その後の展開につながるひとつの傾向なのであろうか、それともハウスホルドの八割が省略された結果として生じた虚像なのであろうか。一六、一七世紀のパターンとの比較が資料的に困難である以上、こうした一八世紀ロッテルダムの空間的特徴を、時間軸の上に位置づけるためには、一九世紀の居住パターンとの比較が必要となるだろう。

formation and subsequent dissolution of powerful aristocratic clans followed by the establishment of a despotic monarchical system.

Residential Patterns in Eighteenth-Century Rotterdam A Historical Case Study

ONISHI Yoshiyuki

Residential patterns in pre-industrial cities became an important subject for historical study in the 1970s; most researchers who study these residential patterns tried to test the validity of G. Sjoberg and J. E. Vance's models. Was there a wealthy and exclusive core surrounded by a much larger area where social status diminished as one moved further away from the center, as Sjoberg suggests? Or was the city in the pre-capitalist age zoned by occupation under the guild system with plural cores, as Vance claims? In this article, the author analyzes the case of Rotterdam, the second largest city in the Republic. Can a different residential pattern be found in this harbor in the Netherlands? From the data, it is clear that the middle class in the center was surrounded by the wealthy on the periphery. This pattern can be understood in terms of the occupations of each area's residents. Only the distribution of the political elite, the regents, cannot be explained by these conditions. Their residential pattern was one of the few signs of their social status.